

令和7年度 外国語科 教科テーマ

「実践する英語—世界への架け橋となる生徒の育成～やりとり型タスクの実践を通して～」

1 研究目的

平成 28 年 12 月に行われた中央教育審議会の答申において、「グローバル化が急速に加速する現代における、外国語によるコミュニケーション能力はこれまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたり必要となること」、「指導改善による成果が認められるものの、学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題が生じるといった状況」、「中・高等学校においては、文法・語彙等の知識がどれだけ身についたかという点に重点が置かれた授業が行われ、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に『話すこと』及び『書くこと』などの言語活動が十分に行われていないことや、生徒の英語力では、習得した知識や経験を生かし、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて適切に表現すること」に課題があることが指摘された。それらを受け平成 30 年改訂学習指導要領では、「簡単な情報や考えなどを理解したり、表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成すること」が目標に設定され、その手段としての言語活動である「話すこと(発表)」、「話すこと(やりとり)」の重要性が挙げられた。「令和 5 年度全国学力・学習状況調査の結果」では、「『話すこと(発表)』の言語活動を行った」と回答した中学校は 86.9%、「『話すこと(やりとり)』の言語活動を行った」と回答した中学校は 76.8% であった。平成 31 年度の調査と比較すると、いずれの数値も上昇しており、各学校において実践が行われたことがうかがえる。同調査では、「即興で自分の考えを英語で伝え合う言語活動や、聞いたり読んだりした内容について英語で書いてまとめたり自分の考えを書いたりする言語活動を行っている学校と行っていない学校では、『英語の勉強が好き』という生徒の割合におよそ 2 倍の差が出ている。(行っている学校 67.3%、行っていない学校 33.6%)」とされており、コミュニケーションを図るための資質としての、自信や意欲をもって自分の思いや考えを友達に伝えるということができない生徒が多い現状があると考えられる。

本校では昨年度より、研究主題を「実践する英語—世界への架け橋となる生徒の育成～やりとり型タスクの実践を通して～」と設定し、生徒たちが英語を学ぶだけでなく、それを実際の社会で活用し、世界とのつながりを築くための能力を養いたいと考えた。「書くこと」「話すこと」だけの活動ではなく、ペアやグループにおけるやり取り型タスクを毎学期実施し、生徒の即興で話す力、反応する力の向上を目指した。生徒はテーマに沿った発表を考えるだけでなく、聞き手に配慮しながら、内容や方法をより良いものにしようと工夫を重ねていた。発表をする立場、聞く立場、それぞれ何度も経験することで、即興かつ伝わる英語での意思伝達を実感することができると考えた。成果として 2025 年 3 月に 2 年生を対象に実施した質問紙調査によると、98.8% の生徒が「タスク活動に意欲的に取り組むことができた。」、95.1% の生徒が「タスクに取り組むことで、英語で話す力が伸びたと感じる」と回答した。自由記述では、「タスクで相手と話し合う中で、質問や巻き込む発表などで互いに理解を深めようとする姿勢の一歩を踏みだせたと思う。」「的確に自分の伝えたいことを表現するために難しい単語を並べても、伝わっていなければ意味がない。聞く人に伝わる英語を使ってタスクに取り組むことが出来た。」「直訳せずに、自分がわかる言葉に言い換える力がついたと思う。留学生と話す時にその力を生かし、即興力と組み合わせることでよりスマートに話せることができたと思う。」などの回答があった。このことから、タスクの発表に取り組むだけでなく、聞き手として相手の発表内容について質問をしたり、伝わっていないと感じた言葉をパラフレーズしたりすることを通して、より円滑に意思疎通が図れると実感していることが分かった。

昨年度より定めている研究主題の下で、生徒が英語を話すだけでなく、コミュニケーションの当事者であるという体験を通じて、人と話すことの楽しさ、気持ちが伝わる喜びを知りながら、社会につながる力を深めたいと考えた。生徒がタスク活動を通じて、知識・技能が実際のコミュニケーションにおいて活用され、思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて学習内容の理解が深まるなど、資質・能力が相互に関係し合いながら育成されるよう、これまで本校で取り組んできた研究同様 Task Based Language Teaching (以下、TBLT) をベースに、真正性のある実社会とつながるようなやりとり型タスク活動を効果的に設定していく。

<研究仮説>

生徒にとって真正性のある実社会とつながるようなやりとり型タスク活動を効果的に課すことで、実際の社会で活用し世界とつながるために英語を学ぶのだという意識を高め、コミュニケーションを図る資質・能力を育成することができるのではないか。

今年度本校英語科では、昨年度に引き続き「書くこと」「話すこと(発表)」型タスクに加え、年間 3 回のやりとり型タスクを設定する。実社会とつながるような魅力的で生徒にとって必要感のあるタスクを設定することで、生徒の「話したい」「伝えたい」気持ちを引き出したい。様々なタスクに繰り返し取り組むことで、新しい語彙・表現を定着させ、繰り返し練習することで即興で話す力がついたという自信を身に付けさせたい。

2 研究方法（検証の手立て等）

- (1) 真正性のある（教室と実社会をつなぐような）タスクの設定
実際に英語を話す人に伝える、社会的な話題、実体験に基づく話題 など
(授業後の生徒アンケートや Task 実施後の生徒の変容を共同研究者の大瀧先生に依頼する)
- (2) 様々な種類のやりとり型言語活動の設定
【挨拶、質問に答える活動、インタビュー】→【提案→質疑応答型】→【ディスカッション、ディベート】
- (3) 帯活動の充実
スマールトーク、スマールディスカッション、スマールディベート、レポートティング